

技術ノート

メイドイン東京のピッグスキンスーベニールの商品開発

大橋健一\*<sup>1)</sup> 小高久丹子\*<sup>2)</sup> 佐藤元治\*<sup>3)</sup>

Development of souvenir made of pigskin, made in Tokyo

Kenichi OOHASHI, Kuniko KODAKA and Motoharu SATO

1. はじめに

東京の地場産業であるピッグスキンの、プリント加工等を得意とする墨田革漉工業株式会社(以下、企業と称す。)は、現在受注生産が殆どである。経営の安定化と今後の生き残りをかけて、企画提案型へ脱皮を図ることが課題となっている。

そこで、「東京の観光みやげ品」をテーマに、オリジナル商品を開発するため、共同研究を行った。近年、中国製等のみやげ物商品が増えている中、東京のみやげ物として、全国・世界各地からの観光客に喜ばれる、「メイドイン東京」の商品を、マーケットに訴求する。

併せて、プリント加工における堅牢度向上につながる試みとして、ソルベント系転写紙の皮革への使用を検討した。

2. 内容

2.1 商品企画

2.1.1 市場調査

観光みやげ品の商品傾向を探るため、下町の代表的な観光地である浅草地区のみやげ物店の店頭調査を写真撮影により行った。その結果、主に修学旅行生を対象とした「かわいい」感覚の「ファンシー/キャラクター商品」が主流を占め、中高年層を対象とした「和」や「伝統」を感じさせる雑貨類等がこれに続いた。

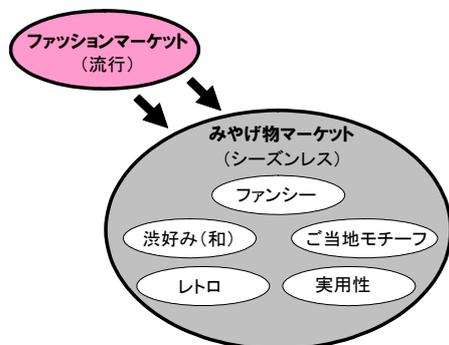


図1 マーケットの現状と商品戦略の概念図

本研究では、店頭調査の分析結果からファンシー(=かわいい)感覚、和の感覚、レトロ感覚、実用性を考慮しつつ、戦略として、企業が得意としているファッションの流行を取り入れた商品開発を目指すこととした(図1)。

2.1.2 コンセプト立案

スーベニール(おみやげ)の特殊性として、他の人のために買う場合が多く、相手の嗜好がわからないため商品選別に苦労すること多い。

今回の商品企画では、企業にとって初めての自主企画であるため、趣向性の強いアイテム、デザインは避けることとした。また、企業の制約(図2の右上)から外注の必要性が少なく、企業の余剰人員の活用(縫製未経験者でも縫える)と少ない設備投資(ミシン等のみ)で社内生産が可能なアイテムを検討した。図2にコンセプトを示す。

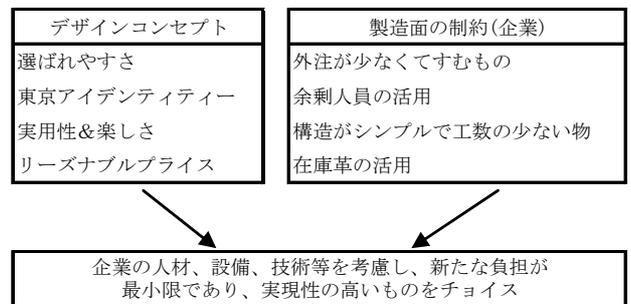


図2 企画コンセプトと製造上の制約

2.1.3 東京アイデンティティの主張

企業の特徴的な技術が、インクジェットプリントによる多彩な柄表現であるため、この部分でオリジナリティを強調することを検討した。

図1に示した、現在のみやげ物商品の傾向とファッションの流行という2つの側面から、柄をデザイン、または企業所有の柄をセレクトした。プロトタイプ開発にあたり今回は、江戸の粋を象徴する「縞」、モダン・インテリアテキスタイルに見られるような「大胆な幾何学柄」、ファッションの流行から「パイソン柄」等を、アイテムとのマッチングを考慮して選択した。

\*<sup>1)</sup> 生活科学グループ \*<sup>2)</sup> 前生活科学グループ  
\*<sup>3)</sup> 墨田革漉工業株式会社

### 2.1.4 デザイン提案

簡易な構造のバッグ（トートバッグ，巾着等），ステーションナリー（デスク回り用品），その他生活雑貨等 10 点のデザイン画を作成し，企業にプレゼンテーションを行った（図 3）。企業の意向，製造の実現性等により，開発商品を巾着，ブックカバー，マウスパッド，財布，携帯シューポリッシャーの 5 点に決定した。



図 3 提案デザイン画

### 2.1.5 ブランド名，ブランドロゴ等の検討

今後，企業が自社ブランドを本格的に展開していくことを考慮し，商標登録を視野に入れたブランド名やブランドロゴマーク，マスコットマークを検討した。ブランド名は Poet（詩人）+ Tokyo から「Poetto -東京詩-」とし，マスコットマークは，日本の古い動物の図柄を基に，和モダンの感覚でアレンジしたものを作成した（図 4）。



図 4 ブランドロゴとマスコットマーク

### 2.1.6 プロトタイプを作成

2.1.4 により決定した 5 点のアイテムの型紙を作成し，副資材等を揃え，プロトタイプを作成したが（図 5），通

常の工業用本縫ミシンで，ほぼ生産可能であることが分かった。これにより特別な縫製技術が不要であるため，外注工程や設備投資を最小限に抑えた生産が可能であることを確認できた。



図 5 商品プロトタイプ

### 2.2 ソルベント系転写紙の皮革への接着試験

ビニール等への転写プリントで使用されるソルベント系インクが，皮革に使用可能かどうか検討した。ソルベントインクは高耐候性であり，屋外のサインディスプレイ等に使用されており，皮革への使用が確立できれば，高堅牢度のプリント加工が期待できる。

試験の結果，現在流通している転写紙は，熱プレス後，剥離紙の固着が強く，剥がれない傾向が顕著であった。皮革のクッション性と，水分を含んでいることが原因と考えられる。本生産には，皮革専用の転写紙の開発が必要と考える。また，プリント面はスクラッチに弱い傾向があり，コーティング処理等を併用する必要がある。以上の点が解決できれば実用化に近づくと考える。

### 3. まとめ

「ビッグスキン製の東京みやげの開発」というテーマのもと，マーケットで売れているアイテムと，企業の戦略，製造の実現性等を考慮したコンセプトを作成し，アイテム決定に至った。江戸の文化や，おしゃれなファッション感覚をイメージしたプリントデザインをのせることで東京のアイデンティティをアピールする商品を目指した。

現在，受注生産が殆どである企業が，存続のために企画提案型への脱皮を模索している中で，モデルケースを確立し，企業に自信を与える研究開発を行うことができた。

### 参考文献

- 1) 沼田元氣：東京スーベニール手帖，白夜書房(2003)，(原稿受付 平成 17 年 8 月 10 日)